
大きな銃に小さな手

九条 ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな銃に小さな手

【Zコード】

Z6906Y

【作者名】

九条 ネギ

【あらすじ】

近年、裏社会で最も恐れられた殺し屋。片手にマグナムと、黒いコードがその特徴とされる『カフイン』が、突如姿を消した。彼が消えた後、最強の席を一人の少女が埋める事になる。この少女は、一体……？

「めんなさい。ボク、悪い事をしました。
何つて、簡単だよ。ボクが君に、悪戯をした。
壊しちゃった。捻じ曲げちゃった。

その頭は飾りか。ボクの頭はただの飾りだ。
君の頭もただの飾りだ。ボクから見れば。

頭どころか、ボクに身体は飾りでしかない。

君が大好きになつたから、ボクに合わせて君を変えた。
さて、君の身体はどうなつたのでしょうか？

朝起きたら。事故に遭つて。氣を失つて。
いつの間にか。知らないうちに。氣付かない内に。
君はボクの都合で、作り変えられたんだよ。
風を流れる。小さく弱い悪魔の手にかかるつてね。

『君は、何も知らないお姫様になつたんだ。ボクの気まぐれに
殴たられて』

鐵道とこの間の血口魔女（後書き）

ぶつちやけ、第三部辺つまでは暗いだけで面白みが無いかもしけないです。

「ブルーノの額に弾丸を撃ち込め」

依頼主は、確かにそう言つた。 本日のターゲットは、ブルーノと呼ばれる金髪の男。 [写真の通りの奴に弾丸をねじ込めば、俺の任務は完了だ。]

彼はその氣に入つてゐるコートに身を包み、事務所の外に止めてあつたバイクにまたがつた。 間にその黒髪を馴染ませ、その青い瞳は闇に浮かぶ猫の瞳の如く。 異様な雰囲気を放つてゐる。

キーを捻り、エンジンを掛けると同時。 音も無く、彼は闇の中へと姿を消した。

月明かりの下で、素早く動き回る小さな影。 それは、ビルの屋上から見ている所為かもしだれない。

時折、火花を撒き散らすその黒いコートの男は、次々に警備員達をなぎ倒すとビルの中へと侵入した。 傷など、一切負うことなく。まるで余裕の表情を崩しそうに無い。 ただ、この表情は彼が明日起きた時には消えているだらう。 ボクの手によつて。

「中々、強いんだ」

ビル風によつて吼えるような音が響く。 ビルの屋上のアンテナから逆さにぶら下がる彼女は、楽しげに小さく笑いた。

「侵入者だ、銃を持つてゐぞ！」

彼の侵入した一階では、大騒動が起きていた。 いまこのビルの中では、とある兵器製造業者のパーティが行われてゐる。 それを見けば、恐らくは誰もが『兵器製造業者の主要人物を殺しに來たに違ひない』と、思うことだらう。 全く持つて、その通りだつた。

彼は歩みを一切止めることなく、それどころかその直進を維持したまま。的確に敵の急所にその弾丸を次々と撃ち込んでいく。彼の通った後には硝煙の、死の匂いが残されている。

使っている銃は、至って普通。

特注品ですらないだろう。ただの、マグナム。それも、型にはめられて量産されている。身分証名称を持つて銃器を扱う店へ買いに行けば誰もが購入可能であろう代物だった。

「俺は、お前らの頭……ブルーに用がある。死にたくなけりや、道を明けろ」

彼の一言は、とても青年とは思えないものだった。

逆らえば、殺される。そんな死神のような一言は、聞いた者の戦意を瞬く間に消し去った。並の人間に、太刀打ちできるような相手ではない。

銃を取り上げたとしたら？いや、無理だ。奴はまだ武器を持つている。

それから、たった十分間の出来事だった。彼は標的の居るフロアに到達し、その銃の引き金に指を掛ける。標的の横に居るボーティーガードも成す術は無く、ただ見守るだけだった。

「見つけたぜ、ブルーさんよ。面倒臭かつたぞ、雑魚の相手は」

その銃口の先には、金髪の男が。無念といった様子で、立ちすくんでいた。

「貴様……カフインか！？」

その男の口から、そんな言葉が吐き出される。

「ああ、俺はそう名乗った覚えは無いが。そう呼ばれている。俺も、使われる人間なんだ、悪く思うなよ」

爆竹のような爆発音が、そのテーブルに並んだワイングラスを貫

き、碎く。

銃口から吐き出される小さな衝撃波に、彼の黒髪が揺れる。青い瞳は、瞬きをすることなく。その弾丸が、ブルーノの額にめり込む所まで。そして、紅い液体を吐き出す所まで。ハッキリと、その瞳で確認する。

「さて、任務完了か。……そこのゴリラ」

ため息をつくと、カフインはボディーガードの一人に札束を投げ渡した。 相当な額らしく、啞然とするほか無い。 どういづ、意図で……？

「これは……？」

「仕事ご苦労さん、依頼主が死んだら報酬が無いだろ？ 大人しくしてた礼だ、俺が払つてやる。 それと、早い所その馬鹿を持つて帰つたほうがいいぜ？ 俺は依頼で“ブルーノの額に弾丸を撃ち込め”と言われて来てるんだ、何て弾だらうがその辺は俺の自由。さて、俺は早い所、警察が来る前に撤退させてもらつぜ」

それだけ言い残すと、彼は窓ガラスを突き破り、闇の中へと姿を消した。

まやかしの血口禰足（後輪）

ブルーノ・デイヴィー

性別 男

職業 兵器製造会社の社長にして、兵器の密売人

侵入者といつ名の自己満足

行きと同様、彼はバイクで帰宅した。音の出ないよう加工しているらしく、電気エンジンにサイレンサーをつけたような。黒いボディであるのも相まって、それは闇の中では不可視にも近いステルスの性能を発揮していた。

だが、そんな小さなことは、彼のオプションでしかない。

彼の真骨頂はその圧倒的な強さと技能にあり、ステルスバイクなどは面倒ごとを避ける無駄な小細工でしかなかつた。

キーを引き抜き、事務所の敷地に入れる。事務所の鍵を取り出すと、彼は面倒くさそうに顔をしかめた。取り出した鍵は、直径五センチ程度のリングにざつと十個以上。そして、扉に設けられた鍵穴はそれの一倍。二十個。

そして、この鍵穴は単純に。一つの鍵で二つの鉤をあけるのではない。ランダムに、一つの鍵で最低一つの鍵穴を開ける。そして、その組み合わせは優に四百通りが存在する。

そして、その組み合わせはカフワインしか知らない。もし、扉を爆破して侵入しようものなら炎熱反応で作動する機関銃の餌食である。

その面倒くさい鍵をあけ終えると、彼はその瞳を凝らし、

「誰だ、何処から入つた？」

闇の中に居る“何か”に対し、問い合わせる。傘立に、見たこともないような白い傘が刺さつている。

そして、もう一つ。“何か”がいるという情報を、匂いが伝えている。淹れたばかりのコーヒーの匂いと、もう一つ。振り椅子の椅子のきしむような音。

……何者だ？開錠して入つたか……？いや、あれを外すには相当時間が掛かる。それこそ、今しがた外出した一時間弱の時間だけで開ける事はまず無理だ。

何だ？『幹部』の……指令伝達であれば有り得ない事ではないが、俺に顔を合わせる決まりがある。闇に紛れていれば、俺が撃ち殺すという行為に出ても良い決まりだ。なのに、その危険を冒すのか？

そこまで考えれば、『幹部』とは関係ない部外者が、この事務所に不法侵入したと考えるのが最も理由としては辻褄が合ひ。

「三秒だけくれてやる、居れば居ると言え」

静かに、腰に挿していたマグナムを手に握った。

「三」

安全装置を外し、撃鉄を引く。

「二」

氣配の元に、銃を向けた。

「一」

「ゼロ？ 居るよ、居る居る。 チョット待つて、暗くて見えなくつてぞ」

高い、女の声。 そして、闇の中を慌しく歩き回ると、どうこうわけかその女は壁を叩き始めた。 一体、何をやっている？

一秒ほど叩き続け、突然。 事務所の電気が点いた。

どうやら、スイッチを探していただけらしい。

「いやー、久しぶりだね。 アレン」

明かりがついた中に立っていたのは、金髪の少女。 どうしてだ？

「何で、俺の名前を知つてんだ？ ……何処の人間だ？」

アレンの言葉に、彼女は特に怖がる様子も無くテーブルにおいてあつた写真立を手に取つた。 アレンの、幼い頃の写真。 孤児院の仲間と、一緒に映つている。

目の前の彼女と同じ、白いコートの女の子。 ……誰だ？

「まさか、ユリアか？ ……よくここが分かつたな、どうやって調べた？」

アレンは驚いたようにユリアと呼んだ少女に向けていた攻撃的な視線を引つ込んだ。 久々の、窓。

それも、自分と同じ人間が来ることなど滅多にない。

殺し屋でも少し、嬉しかつたりする。

「いや、ボクはアレンを探してたわけじゃ……無いって言えば嘘になるかな。ボクさ、君と同じで殺し屋……やつてるんだけど……」

楽しげだつた彼女の表情が、一気に曇る。どうやら、個々に来た原因を話したくは無いらしい。だが、話してもらわなければこつちも状況の把握が出来ない。

「どうした？俺を殺せつて依頼でも受けたか？」

アレンは冗談混じりにユリアに問いかける。だが、ユリアからの返事は無い。

むしろ、冗談を言う前といった後で、明らかに。ユリアの表情は曇つっていた。

「……そ、うなんだ。ボク、君を殺せつて依頼を受けたんだよ」

「んあ？マジだつたか、そ、うか。んあッハッハ！大丈夫だ、殺そうとしても返り討ちにしてやる」

アレンは楽しげに笑うと、ユリアの表情が少し楽になつたような気がした。

そのまま、アレンは言葉を続けた。

「構わないぜ？俺は、誰にも殺されねえ。……お前も、殺すつもりはねえよ」

そんな言葉と同時だつた。……殺人鬼という生き物は、敵であればどんな人間に對してであれ。非情になれるものだ。

手に握つたままだつたマグナムの銃口を、一瞬の内にユリアの胸元に向けたかと思うと、発砲。赤い液体が飛び散り、ユリアの身体は仰向けに倒れた。

「……な、殺しちゃいねえだろ？少し痛かつたかも知れねえけどよ、俺は人を殺すつもりはねえよ」

アレンの言葉の直後、ユリアは驚いた様子で起き上がつた。

ユリアの胸元を紅く染めるそれは、油性マーカーのような匂いが

する。ペンキではないようだが……ペイント弾？

「今日の依頼も、そうだ。結構強い麻酔仕込んじゃいるが、殺傷力は殆どゼロだ。痛かつたらごめんな」

「いつも、いつもやつて誤魔化してきたの？」

コリアの問いに、アレンは楽しげに頷いた。アレンが頭を上げると同時に、コリアは目の前で。アレンの胸元に銃口を突きつけていた。

アレンの銃は、アレンの手に。つまり、この銃はユリアのもの。

「悪く思わないでね、少し痛いだけだから。仕返しだよ」

発砲音。そして、銃口から立ち上る煙。確かに、死にはしないが少し痛い。

「……なんだよ、お前も……れ？　ずいぶん……強い麻酔……だな……」

その言葉が終わる前に、アレンはうつ伏せに床に倒れた。

「あれ？　……実弾と間違えたかな？」

性転換といつねの自己満足

夜中、突如アレンは目を覚ました。それは、シャワールームから聞こえてくる水の音が原因というわけではない。

寝かされていたソファ横の机に『シャワー借りてるよ』という書きがある辺り、どうやらコリアの訪問は夢オチといつわけではなさそうだ。メモを抑えていた自分の銃を引き出しにしようと頭を抱え、ソファにもう一度倒れこんだ。

床に倒れたと思ったが……よく持ち上げられたな。まあ、俺にそこまで物凄い体重があるわけではないが。むしろ、軽いくらいか？

にしても、即効性つてだけで結構弱い薬だったか？

「う、……気分わいい」

思わず、そんな言葉がアレンの口から漏れる。

何だ、気分が悪い。酒を飲んで酔ったような……酒なんて飲んでねえぞ？

そんなことを考えている間にも、気分の悪さから発展したのか。頭痛がアレンを襲う。が、頭を抱えることしか出来ない。そうしている間にも、痛みは頭どころか、腹部を中心に。全身が焼けるような痛みが彼を襲う。

「マジで……どんな薬仕込んでたんだよ……」

損な小さな吐き出すような言葉とともに。アレンは一瞬痙攣したかと思つと、気を失つた。

「うー……」

気がつけば、どうやら痛みは引いたらしい。全く、どんな強烈な麻酔しこんでたんだ？ あの弾丸。

ソファから起き上がるとき、視界に違和感を感じる。
そして、顔の横から降ってきた黒い、長い髪の毛。

これは……一体？

「あ、目が覚めた？」

アレンに圧し掛かり、ユリアが笑顔で拳銃を向けている。

……まったく、事務所の中で銃向けるの止めろよ。侵入者に銃を向けてるわけでもなければ、俺を殺そうとしてもう撃つたろ？殺さない所を見ると、多分、ユリアの依頼弾丸を撃ち込めだとかそんなところなのだろう。

つーか、いい加減俺の上から下りろ。

「中々、可愛い服でしょ？ 私の……学校の制服」
「いや、普通二口一着いとるわ。うう」

「いや、それ『一』だらう。」

高くなっている。そして、この長い髪。

導き出される答えなど、知りてしむやうな経緯でかは謎だが、現時刻を待つて。段々『カハイ』、『女の方』など。

と、言ひ事だ。

「何だよ……これ……」「

「私の学校指定の、制服」

アレンは恐る恐る、自分の身体を見下ろした。……よく分から

ユリアの方が目線の高い事に気付く。 身長が百六十程度のユリア
より目線が低いのは、何とかショックだ。

「……一個断つておくれが、俺は服装のことで言つておじやねえ」

大急ぎで事務所の中を駆け抜けると、洗面所の鏡に向かう。

「……これが、俺かよ」

アレンの自分を見た第一声。透き通るような、ソプラノの通る声が、洗面所に響く。

「可愛いでしょ？」

追いかけてきたコリアの口調。そしてその表情は、明らかに何かを“知っている”と言っていた。

「お前……その顔はどうしてこうなったか分かってるだろ……」

「うん、昨日打ち込んだあの弾丸。あれね、ナノマシンで身体を最適化する効果があつたんだ。まさか、女の子になるとは思わなかつたよ」

ナノマシン？また新しいのを開発したのか、あの馬鹿研究機関のイカレ学級ども！

「……最悪だ、今日は面白がつくなイベントがあんのに」

先読み不能と並んでの障害（前書き）

わたくし、この辺からネギは暴走しようと思こます（笑）
なにがどうなつたらいつなつた のノリが若干この辺から入つてくる予定

「面白そうな……イベント？」

コリアは不思議そうに、アレンを見た。

「ああ、詩人の幹部から、スカウトを受けた。 “うちで働かな
いか”って」

アレンの言葉に、ユリアも納得した様子で手に持っていた銃を腰
に挿す。

「成程。確かに、カフィンは殺し屋の最上位とまで言われて
からね。ミンストレルからスカウトがあつても不思議じゃないし
……今までに何度もあつたんじゃないかな？」

「ああ、いままでずっと断り続けた。今日は、条件付でオーケ
ーしてやつたけどな」

コリアの制服の上着を脱ぐと、アレンはいつもの黒いシャツを着
ようとするが、中々着れず、着るのに手こずり、腕を通して見たみ
たものの、ダボダボでサイズが合っていない。

が、構わない様子でスカートを脱いだ直後。 彼は。いや、

彼女は赤面した。

自分の穿いていた物をみて、絶句する。

「可愛いショーツでしょ？」

黙つている彼女に、ユリアが言い放つ。

「何着せてんだ、俺はお前の着せ替え人形じゃねえぞ！？」

「いやーん。怒らないでよ、怒つても可愛いだけで怖くないけ
ど。安心してよ、その辺のコンビニで買つてきたものだから」

く……クソ……。完全に、舐めきつてんな、ユリア。

再起動してショーツを脱ぎ捨てると、いつも何時も通り。自分
の着ている服装で、黒いコートを羽織るが中々どうじてこいつ様にな
らないのか。

男の時との身長差が十センチ以上あるため、明らかに変だ。

鏡を見て、アレンは思わず黙り込んだ。そして、数秒の空白の後、口を開く。

「なあ、これ戻せないのか……？」

悲痛な、一言。それに対し、ユリアは笑顔を向ける。

「戻せるよ」

予想外の答え。

「ナノマシンを、もう一度打ち込めば良い。ただ、撃ち込んだ時と同じで痛いけど良いの？」

ユリアの言葉に、アレンの表情が一気に晴れる。

「痛みは、耐えればいいだろ？ 戻してくれよ」

アレンの答えを聞いて、ユリアは携帯電話でどこかにメールを送る。

「一応、確認とつておかないといけないから少し待つて」

そして、その十分後。ユリアの携帯の着信音の後、ユリアは無言でアレンに頭を下げた。

「『』めん、無理だつた」

予想外の答え。

「戻せるんじゃなかつたのかよ！？」

アレンが半ば叫ぶ。が、怯むことなく、

「戻せるように造つてあつたはずだつたんだよ。けど、打ち込まれた後もナノマシンは増えながら進化を続けちゃうから。ボクたち人間の予測と頭脳じゃ、どう進化したのを破壊するか。先読みして破壊するのは無理なんだつて。それに、もう一度打ち込んで戻そうとした被検体が全滅したつて報告書まで画像添付してきてる

ユリアの言葉に、再びアレンは落ち込んだ様子で事務所のソファに腰掛けると、引き出しに夜の内にしまっていた拳銃を取り出すと、腰に差し込んだ。

「……まあ、仕方ないな。死ぬモンじゃねえし、何より、詩人の連中を待たせると後が面倒だ」

先読み不能と書かれたの障害（後書き）

Minstrel

ミニストレル

直訳で吟遊詩人

「ポートのサイズなど気に留めることなく、アレンはバイクにまたがった。そして、アクセルを靴のつま先で蹴飛ばした。バイクだけは、特注だ。

手元にブレーキを付けておいて、今は良かつたと思つ。

今の身長では、どうしても足のつま先でしかアクセルに届かない。身長が十センチ低いだけで、ここまで落差が出るものなのか。アクセルを蹴った足で、バイクの側面に引っ掛けた合ったヘルメットを蹴り上げ、右手で手に取るとそれを被る。が、髪の毛が邪魔だ。

「髪、切つてくりや良かつたか……？」

事務所には、ユリアを残している。基本的に、あの事務所に隠すものなど無い。アレンが男でも、いかがわしい写真集がベッドの下にあるわけではない。あるとしても、一階の壁や一階の台所の床を叩くと板が回転して出てくる拳銃コレクションしかない。

他にあるとしても、兎のホルマリン漬けや、ハツカネズミの剥製など。全くわけの分からぬガラクタしか見つからないだろう。

信号で止まると、アレンはヘルメットを取り、視界にチラホラ入り込んでくる長い髪をその中に入れなおす。信号が青に変わると同時に、アクセルを蹴飛ばすと速度を上げた。

風を切り、ビル群の中を切り裂くように疾走する。しばらく走り続けると、ようやく。指定された場所へと到着した。

場所は、とある廃墟。調べた情報によると、一週間後から解体工事が始まるらしい。その、地下駐車場で、待つとのことだ。

その日のうち、正午以降であれば時間の指定は無い。ただ、深夜十二時を過ぎた時点でこなれば、話しあは無かつた事になるらしい。

詩人という規模の知らない巨大な組織は、アレンのような裏の人

間には魅力である。秩序維持を盾に、堂々と仕事を行える。が、場合によって。

今回のように呼び出された後に、待ち伏せにあつて死ぬ場合も多いらしい。

「さて、鬼が出るか……蛇が出るか」

アレンは平然と金網を突き破り、駐車場に乗り入れると地下への通路を突つ切つた。灯がある辺り、誰か人間が居る。

バイクのエンジンを切ると、地下駐車場のど真ん中で、アレンは待つた。ヘルメットを被つたまま、堂々と直立している。

撃つのであれば、良い的だ。だが、殺される程度のリスクは、アレンにとつては特に大きなものでもない。このまま、アレンを殺すつもりならば。詩人の連中は躊躇無く、このビルを解体爆破するだろう。だが、駐車場に入り込んで五分経つが、一向に爆破する気配が無い。

それどころか、人の気配一つしない。と、感じていた。

だが、それは思わず所から最初から、アレンの目の前に居た。

「君が、カフイン？」

第一声。目の前で、無尽の空間から聞こえる声。だが、そこには人……居た。いつの間に？

「ああ、そうだ。お前……いつからそこに？」

「君が……来る五分前から。君が、僕の存在を景色としてしか認識できないのは、僕の生まれつきでね。……おつと、自己紹介をすべきだつたね」

白髪の男は、その死んだような瞳でアレンを見た。だが、実際はアレンと目を合わせないようには必死だ。彼の瞳に仕込まれたカラーコンタクトがアレンを注視し、実際の眼球はあさつての方向を向いている。

「僕は、おとなし音無むおん無音。ミンストレルの、戦闘部隊、蜘蛛の隊長を務めているんだ。ああ、出来れば僕をそんなに見ないでくれ。

僕は、人と接するのが苦手なんだ。
にタバスコジユースを飲まされてね。
いないんだ」

彼はアレンと田を合わせないよう、ついには真横を向いてしまう。
何だ、この奇妙な面白人間は……。

「お前の情報はどうでも良い。 どういうトリックだ、俺の視界に居ただと？」

変声機を通したアレンの言葉に、呆れたように無音はため息をついた。 恐らく、アレンの考へてている事。 そして、隠している事を見抜いている様子で。

「僕の、能力だ。 不可視の^{インペシブル}標識^{サイン}、が、僕の生まれつきの力でね。 僕から接触しなければ、僕は景色にしか見えない。 君だつて、そうだろ？ カフインって“黒ノ棺事件”から活動しだした。 ちなみに、僕の能力レベルはマイナス？だよ。 危険度はＳＳクラスマーカーだけね。 目を合わせたくないのもそれなんだ。 能力者の中に目が合つただけで僕を殺せる能力があるかもしれないし。 何より君がそうかもしれないだろ？」

無音の言葉に、アレンは驚いた様子で。 そして、不敵な笑みを浮かべる。

「そうか。 で、俺の姿は分かっているのか？」

「ああ、写真もあるぞ」

無音はポケットを探ると、アレンに投げ渡した。 今、明らかに写真からも目を逸らしたろ……。

無音の持っていた写真は、男。 そして、今のアレンは……女だ。

「名前は割れてるのか？」

アレンの言葉に、今度は違うポケットから無音は手帳を取り出すと赤い付箋のページを開き、軽く息を吸い込んだ。 そしてそれをゆっくりと読み上げる。

「アレン・ブラックウッド。 分かつてるのは名前だけじゃない。

昔、友達だと思つていた人
それ以降、僕は人を信じて

フィオ・シユレー・ディンガーの孤児院出身。その孤児院の火事と同時、黒ノ棺事件同様。棺に詰め込まれた盗賊が蒸し焼きにされていたのが、君である決定的証拠かな」

若干、面倒くさそうに手帳に貼つた新聞の切抜きをアレンに提示する。

「僕は人間の顔見たくないんだけどさ。確認義務があるんだ、そのヘルメット……いい加減とつてよ」

無音の言葉に、一瞬アレンが硬直する。

「……多分、その写真と姿は違うぞ？　いや、違うな」

「別人であれば、殺せと言われてきてる。別人とか、影武者なら……今の内に逃げることをお勧めする。けど、逃がすつもりも無いかな」

腰の鞘に突き刺さっていたナイフを手に取ると、無音はアレンに対して構える。が、アレンは動じる様子も無く、躊躇することなくそのヘルメットを脱ぎ捨てた。

コンクリートの地面上に、ヘルメットがぶつかる音と同時に、その場の静寂を切り裂くように、金属同士の衝突音が闇に響く！

衝突音の直後。長い黒髪を散らし、アレンは音無の握ったナイフを避ける。避けた直後、銃のグリップを音無に叩きつけると、音無はそれを握り、力任せに引いた。その弾みに、アレンは音無と目が合つた。アレンの攻撃的な青い瞳と、音無の死んだような蒼い瞳が合つた。

直後、音無はそっぽを向くと、距離を設けてカラーコンタクトを捨てた。

今度は堂々と、アレンを見据える。

「へえ、ずいぶん可愛らしいね。影武者かい？　僕を……見るなよ！」

突然だつた。突如狂つたように、おびえた様子で。無音はその刃を振りかざす！　が、それをアレンは銃の背でいなし、無音の頭に。その銃口を突きつける。

「引き金引けば、お前は死ぬぜ？」

威嚇するように。その鋭い視線が、言葉が、無音に突き刺さつた。

「引けばいいじゃないか。僕は、この世の中を呪いながら死ぬだけだ。何でも良い、僕を見るな」

無音もまた自分同様、死を恐れない人間か……。悲しいな、こういう人間を見るのは。

「いや、殺せねえ。撃たれてみるか？ この銃で撃たれても、五時間くらい寝るだけだ」

アレンが銃の撃鉄を引くと、音無しは諦めたように態度まで大人しくなつた。

「……君は眼を合わせても殺す力は無いんだね。……表に、僕が呼んだ車が来る頃だ。それに乗るか、バイクで付いて来てくれればいいよ。君は、カフワインの偽者だとしてもスカウトするに値するほど強い」

音無の言葉が終わると同時に、駐車場の出入口からクラクションの音が、コンクリートの壁に響く。

「ああ、これだよ」

認識不可能といづれの障害（後書き）

音無君登場♪

次は童子を出したい所だけど、キャラの関係上出せないという悲劇が

そうだな、天才だつたし

ナノマシンの開発者で出そうかな……？

△ネギの氣まぐれ解説△

能力者レベルは、能力者の魔力の含有量

危険度は、その能力そのものの危険性

能力者レベルが高ければ、その分能力の発動時間が長く

危険度が高ければ、その能力を悪用した場合の被害が大きい。

能力者レベルに差があつとも？である能力者と？の能力者が戦つたとして

レベルではなくレベル上位者以上に危険度が高ければレベル？がまづ、勝つことになる

人間で現在確認されている能力者のレベルは、マイナス？～？。ゼロも存在

危険度はF～Sまで

後に、作中でこのことは少し触れる予定

仕事の質問と「ひきの障害

無音の指示で、黒いコートの大柄で強面の部下達がテキパキと仕事をこなす。騒ぎによつて通報を受けて来た警官を誤魔化し、アレンのバイクをその黒い車の後ろに括り付け、そして手の空いている者が“カフイン嬢”をエスコートするわけだが。

アレンは前二つは良いとして、後の一つ。エスコートというものが気に入らず、むくれてている。

「なあ、無音。俺は、今どんな扱いなんだ?」

思わず、無音に問いかけるも、無音は指示出しに忙しいらしい。こちらの質問に答える気配すら見せなかつた。仕方なく、真横まで歩み寄り、

「おーい、俺の今の扱いはどうなつてんだ? 危険人物か?」

耳に直接、その言葉を流し込む。

途端、驚いたように無音はアレンから遠ざかつた。

「ああ、君の扱いは丁重に^{ヒツヂ}つて指示してゐる。けど、彼らが何かしたかい? 十分もしたら、僕たちは拠点へ行つて、ボスに君の事を報告させてもらう。で、運が悪ければ君は死ぬかも。ケド、僕は、守つてあげるから安心してくれていよいよ」

真赤な顔で、アレンに返す。どういうわけか、やはり顔を合わせようとはしない。

視線が合つても、死なないつて分かつたる? 何でまだ、視線を逸らすのかね。

「カフイン嬢、こちらへ」

部下の一人が、車の戸を開きスタンバイしているわけだが。アレンはそれに対し、不機嫌な様子で『アリガト』と小さく呟くと警戒することなく車の中に乗り込んだ。

「さて、吟遊詩人^{ミンストレル}第二支部へ向かってくれ。新人の戦力テスト

をする必要がある

いつの間にか車に乗り込んでいた無音は、運転席の部下に指示出しを続ける。どうやら、人と接するのが苦手と言っていたわりには、カリスマ性があるらしい。

その間に、部下の一人がアレンに紅茶を勧めてきた。どうやら、無音の気遣いらしい。

的確な指示を、順序良く出すのは中々、人間嫌いや自閉症の人間にできる事ではない。

「さて、アレンだつたよね？ 僕の質問に、答えてもらひよう」
車が走り出すと、無音は再び殺氣の手帳を開くとそのページに記されていた質問文を読み上げる。

「質問その一。君の能力は？ 恐らく、君がこの間襲撃した兵器会社のパーティー会場に残されていた黒い塊と関係があるんだろう？」

思わず、アレンはいましがた勧められた紅茶を噴出しそうになつた。

いきなり、能力者の。殺し屋のトップシーケレットである能力について、聞くか？ まあ、この場合は答えるべきだが。

「能力名は黒ノ棺。^{ブラックカーフィン} 対象の持つ物質エネルギーをそのまま利用して、俺にもよく分からん黒い塊にする力だ。固まりになつた直後、運動エネルギーは消えるからな。カーフィンの襲つた所に時々落ちてた黒いビー玉は塊にされた弾が縮小したものだ。大きさによると、金属だつたら能力発動から数秒で百分の一以下に縮小するからな。恐らく、ビー玉大だつたら大型の対戦車用の大砲だろ」

彼女の言葉に、無音は驚いたような表情で彼女を見つめる。彼女が無音の方に疑問符を浮かべつつ顔を向けると、無音は顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。そして、手帳に走り書きを残すと再び口を開く。

「質問その二。能力者レベルと、危険度ランクは？」

無音の言葉に、アレンは微笑した。

「能力者レベルはゼロ。危険度はＳＳ。俺は、魔力なんて持

つてねえよ

アレンの述べた数値を、無音は再び手帳に書き込む。

「へー、君はレベルゼロなんだ。道理で、話しかけるだけで僕に気付いたわけだ。皆、僕が触れないと気付かないのにポケットを漁ると、無音は更にマーカーを取り出し、レベルゼロという部位に伏線を引いた。

「最後の質問。彼氏は居る？」

アレンは思わず、その質問に言葉を失った。これは……

「まさかとは思うが、お前個人の興味本位とか……無いよな？」

アレンの言葉に、無音が一瞬反応したような気がした。

「え？ 違うって、違うよ。僕の興味本位のわけないじゃないか、仕事だし！ へー、僕が君に恋愛感情を？ あるわけないだろ？ 君は、書類上男なんだから！ 第一、僕より強い阿婆擦れさんに、僕が興味を持つわけが……」

直後、慌てふためいた様に無音は弁解を始めた。さつきから、どうもこの男の思考は読めない。

「……どうでもいい質問だな。これは答えるべきか？」

「……どうしても嫌なら、答える義務は無いよ」

どうにも、この様子は仕事上の質問とは思えないが、仕方ないな。

「誰も……好きになつたことが無いな。言わせてみれば、仲が良かつたのはユリアだけだ」

アレンの言葉が終わる頃、窓の外から、大きなビルが近づいてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906y/>

大きな銃に小さな手

2011年11月23日13時46分発行